

(仮)  
郡山藩分限帳  
(江戸勤)

(解題) 現在「柳沢史料集成第二巻 分限帳類集」に収録されている郡山藩幕末期の「分限帳(上・中・下)」は、おそらく安政三(1856)辰年に作成され、慶応四(1868)辰年初まで追補されたもので、国許勤には「国」表示がなされている(表示のないものは原則的に江戸勤)。これに対して本文書は江戸勤のものに限って、おそらくこれより六年前の嘉永三(1850)戌年に作成され、部分的に元治元(1864)子年まで追補がなされたものであり、この間の昇進や郡山・江戸間を含む異動状況が部分的ではあるが判明し、藩全体の中で江戸藩邸への藩士配分等も解明しうる貴重な史料である。

さらに一部判読困難な部分もあるが、藩士の宗旨や檀那寺が記されており、階層別の宗旨等も判定できるので、その意味でも貴重な史料となりうるだろう(ほぼ全藩士について記載があり、単身赴任藩士の国許檀那寺との関係等を考察する手掛りになりうる)。

なおこれらによると本文書の主要筆者阿部軍内は安政三(1856)年分限帳に三十八歳と記されており、文久二(1862)年三月に四十五歳で「御書院詰」に昇進しているが、嘉永三(1850)年作成の江戸分限帳には「御書院詰」と記されているので、例外的に文久二年迄追補がなされていることになる(無理矢理に挿入した痕跡あり)。

また付属資料は「同 柳沢家譜集」に収録された保泰期「縁戚記」の解説に加え保興・保申期に追加すべき部分を付記したもので、飽くまで会員用に仮作成したものではあるが、一応ここに収録しておくものである。

## 御家老

戊三十五

a 一千石

松平但見

御役料 二百俵

(注) ①(安政分限帳 以下同) 1に御家老千二百石御役料二百石とあり、記事日付の慶応元(1865)年五月迄は千石となっている。つまり慶応元年五月の加増は追記反映されていないことが分かる。また年齢については、①では辰【安政三(1856) 丙辰年】四十一とあり、本書の戊【嘉永三(1850) 庚戌年】三十五と一致している。このことから本書の作成起点は嘉永三年でその後の変化が追記されたものであり、①は同じく安政三年でその後原則として慶応四年初期まで追記されたものであることが推定される。それでは本書の追記は何時迄なされているかであるが、個別記事から見ても、概ね元治・慶応初期までは追記されているようであるが、本書は原本ではなく何らかの意図をもって書写されたものと思われ、その追記時期は区々である。

b 一千八百石

柳澤内膳

戊四十四

(注) ①には該当すると思われる者がおらず、現時点では諸記録にも見出せていない。一方②の柳澤五郎右衛門(藪田隼人)の年齢は、安政三辰(1856)年で十八歳であり、嘉永三戌年では十二歳になるので、おそらく父子関係であろう。

c 八百石

大山将監

御役料二百俵

辰五十

(注) 慶応元年五月死去。②1には跡目と思われる寄合衆千石大山弥兵衛「丑

二十二」がある。この「丑」はおそらく跡目相続の慶応元乙丑年と思われる。

(「老」脱力)

御家格

勤方本役之通

d 一 六百石

藪田忠左衛門

御役料二百俵

辰六十

(注) ②5には慶応三年三月に寄合衆九百石とある。元治二(1864)年には「家老」となっているので、本項はそれ以前の記事である。「真華院道中記」においては、文久三(1863)年四月家老として箱根関所出張の記事がある。ただ「辰六十」とあるのは安政三辰年の分限帳基準であり、本来であれば嘉永三戌年基準の「戊五十四」とすべきところであり、何故こうなっているのか分からないが、或いは後代に分限帳から転記追補したのか。なお彼は天寿を全うしており、天誅組の乱に際して会津藩士に暗殺されたという事実はない(暗殺されたのは養子の藪田極人である)。

大寄合

e 一千石

石澤條太夫

(注) ①18に元治元六月寄合衆七百五十石石澤佐大夫「午(1858)二十六」が記されているが、これが跡目であれば本項は元治元(1864)年以前の記録となる。

f 一 五百六十石

横地段之助

(注) ②56に御鍵奉行(小普請)六百三十石横地省吾「申三十一」が記されて

いるが関係不詳。なお「豊田家廻状留」に万延元年三月の櫻田門外の変に際して、段之助名で藩内に大目附布達を命じている。

g 一 九百五十石 斎藤丈太郎

(注) ⑦の大寄合同高・斎藤孫兵衛(丈太郎)「辰二十九」が記されている。同人は元治三(1864)年には家老と記されている。

## 御年寄

浄土宗日暮里村宗福寺

h 三百五十石 上 吉田次郎右衛門

戊四十五

(注) ⑧に大寄合三百五十石御役料百俵「辰五十一」とあり、年齢差が六歳で記述年齢と一致しているので同一人である。

禅宗市ヶ谷月桂寺

i 三百五十石 上 北條弥一右衛門

戊五十七

(注) ⑩114に寄合並三百二十石北条織人「辰四十」が記されているが、年齢差は二十三年で父子関係は微妙。

## 御年寄並

禅宗下渋谷福昌寺

j 三百七十石 上 今井新左衛門

辰五十

(注) ⑩245に松之間詰二百七十石今井馬之輔「寅十七」が記されているが、

この石高は松之間詰では異例であり、「寅」が慶応二寅年を示すとすれば、若年の後継者かも知れない。

2

## 寄合衆

禅宗谷中端松院

a 二百六十石 池田弥八郎

(注) ⑩28に寄合衆二百六十石江戸勤「辰五十」とある。

禅宗市ヶ谷月桂寺

b 二百二十石 内田藝馬

(注) ⑩10に御年寄並二百四十石御役料六十俵国許勤内田收助「辰三十六」が元治元年九月日付で記されているが、本書では「4b收助」は御側御用役三人扶持御役料二十俵という微禄であり、これは部屋住の出仕例とみられるので、藝馬は当時は内田家当主(收助父)であろう。なお「藝」は「襲」か。

## 御用人

法華宗浅草田畝慶印寺 御留守居

c 三百七十石御役料共 久城準輔

(注) ⑩63に大目附(御留守居役)百石御役料二百俵江戸勤久城壮輔「辰四十二」が記されているが、壮輔は本文書7eに御目付として記されているので、準輔については⑩に記載がない(旦那寺が同一であり縁戚と思われる)。

浄土宗駒込四軒寺町瑞泰寺 御奥

d 二百石御役料共 膳 善太兵衛

(注) ②9に御用人衆百四十石御役料百俵「辰七十三」という高齢の用人が記されている。一時期真華院付江戸勤であった。

禪宗駒込千駄木<sup>〔総〕</sup>禪寺

e 二百五十石御役料共 渡辺曹蔵

(注) ②0に寄合衆二百七十石渡辺多門「辰四十三」が記されており、この人物が渡辺家当主(6b御用達並渡辺多門の父)と思われる。

御用人並

浄土宗四ツ谷北寺町浄運寺

f 百七十石御役料共 池谷左軍治

(注) ①7に御年寄並(御入ヶ方奥)百五十石御役料百五十俵国許勤「辰四十三」とあり、記事日付は慶応三年四月となっているので、この頃帰郡か。

寄合並

十一人扶持 内田收助

御役料十二俵

(注) 4bに御側御用役役料二十俵として収録されているが、①0には御年寄並(文武・武具御用掛)二百四十石御役料六十俵国許勤「辰三十六」とある。元治二年九月までは「御刀番兼」とあるので江戸勤か。

3

浄土宗小石川大善寺

a 八十石御役料 高瀧官右衛門

(注) ①43に御目付(芝御屋敷御留守居兼役宗門改御用掛)四十石御役料五

十俵江戸勤(高瀧小藤治)「辰三十七」が記されているが、関係等不詳。

禪宗本所中郷原庭福厳寺 彰太郎様御家老

b 七十七石御役料八十二俵 奥村駿助

(注) ⑤3に御鍵奉行百石御役料五十俵江戸勤「辰五十九」とあり、記事日付慶応三年六月迄の前職は「彰太郎様(三日市藩主徳忠)御家老御附人」であった。文久三年「真華院道中記」にも三日市藩家老として記されている。

浄土宗麻布白金西光寺 御書札改役

c 六十五石御役料二十俵 野崎左兵衛

(注) ①38に御使番(鎌之助)六十石江戸勤「辰三十五」と記されているが「真華院道中記」の御駕脇役との関係は不詳(本書には13f松之間詰三人扶持「野崎鎌之助」が記されており、継名と思われる)。

禪宗芝岸町光宝寺

d 六十石 高田貢蔵

(注) ①02に寄合並七十六石江戸勤「辰六十二」の高齢者が記されている。

浄土宗三田寺町長松寺

e 三百六十石 萩生惣右衛門

(注) ⑤3に御鍵奉行(儒者御年録御用掛兼御系譜御用掛)三百五十石江戸勤「辰三十八」とある。

浄土宗青山宿梅窓院 御医師

芝新堀稻荷横丁

f 相原岸庵

(注) ①該当者なし。

寄合並小普請

御奥御用達

法華宗谷中大雄寺 本遊院様御附

g 九十石御役料 村上鍛十郎

(注) ⑤58に御奏者番八十石御役料七十俵江戸勤（伊勢守様御家老附人）とあり、慶応元年十一月に前職本遊院様御附人とあるので、本遊院（保興実母）文久二年閏八月没まではその付人であつた可能性がある。

浄土真宗四ツ谷北寺丁正應寺 御奥御用達

h 百四十石御役料共 小澤傳左衛門

(注) ⑨97に御弓鉄砲頭百十石御役料九十俵国許勤「辰三十五」小澤左平治があるが、 同人は本書13fの部屋住出仕小澤武司であり、記事日付の慶応三年五月に跡目相続帰郡までは、この人物が小澤家当主（武司の父）であつたと思われる。

浄土真宗駒込富士前教元寺

i 九十石御役料共 平田六左衛門

(注) ⑩108に寄合並七十二石御役料三十八俵国許勤「辰四十」、前職「真華院様附」とある。

4

浄土宗下谷盛雲寺 本遊院様附

a 九十石御役料共 高野武助

(注) ⑪154の御目付四十石御役料五十俵高野学馬「辰二十五」と関係ありか。

御側御用役

b 一、三人扶持御役料二十俵 内田収助

(注) 2bの寄合衆内田藝馬、及び寄合並抹消分（注）参照。明治二年藩政治局で安元彦輔と共に参政となる。

浄土宗芝増上寺地中常照院 御中奥

c 七十五石 濱田金三

(注) ⑫188に御書院詰七十五石江戸勤「辰三十一」とある。

御使番

浄土真宗芝金杉了善寺

d 七十五石御役料共 下山七郎兵衛

(注) ⑬126に御使番五十六石御役料四十俵国許勤「辰三十八」下山兵治があるが関係不詳。

法花宗牛込神楽坂善国寺

e 百石 高田東馬

(注) ⑭126に御使番六十石御役料四十俵江戸勤「辰五十九」とあり、文久二年迄「本遊院様附」とある。

法華宗深川浄心寺 南蛮流師範役

f 百九十石御役料共 近藤亘理助

(注) ⑮45に御鍵奉行銃隊奉行兼百八十石御役料四十俵国許勤「辰三十七」とあり、元治二年四月に帰郡か。

## 御番頭

禪宗駒込江岸寺

g 二百五十石御役料共 野口津盛

(注) ①17に寄合衆百二十石江戸勤「辰六十」とあるが、万延二年正月迄、百石御役料百五十俵「表御用人寺社方御用掛」とあり、禄高の異動が不自然。

5

天台宗下谷廣小路常樂院

a 二百五十石同共 稲野寛右衛門

(注) ①56に御鍵奉行三百石江戸勤「辰三十一」稲野多蔵があるが関係は不詳

## 御鍵奉行

(注) ①には身分席次(役職)区分が示されており、御家老から御鍵奉行迄については所謂重臣として「従是以上銀馬代」としている。主な席次(役職)は「家老、大寄合、御年寄、御用人、寺社奉行、御番頭、御旗・御鍵奉行」である。ただ本書では「寄合並・御使番」の位置付けに問題があるように思う。なお「銀馬代」とは重臣クラスの円満跡目相続については御礼の献馬が習いとなっており、それを銀で献上したことに由来するものである。①収録数は68名、本書収録は33名であるが、①と区分が相違しており修正すれば18名となる(家老大寄合等は含む)。

## 御用達

法華宗深川浄心寺

b 百十石御役料共 村上十学

## 御奏者番

(注) ①30に御用人衆百十石御役料七十俵江戸勤「辰六十四」とある(高齢者)。

法華宗芝二本榎承教寺 御取次勤

地中妙福寺

c 二百石御役料共 上原登

(注) ①286に御馬廻組百六十石上原富次郎「丑十七」が記されているが関係不詳

## 大目付

禪宗浅草新寺丁永見寺 留守居

d 三百石御役料 瀧内蔵之進

(注) ①に關係者らしき人物はいない。

真言宗巢鴨真性寺

e 百五十石御役料共 荻原数馬

(注) ①29に寄合衆百八十石江戸勤(数馬)「辰四十二」とある。

禪宗芝高輪功雲院 御入ヶ方御用懸り

f 百石御役料三十俵 岩手孫右衛門

(注) 岩手孫右衛門は、元治元年の藩主保申領内巡見に同行した用人として、また「真華院道中記」やその他の阿部家文書で江戸詰大目付として頻出するが、①には見えない。ただ①246松之間詰二百二十石岩手武次郎「卯十七」は、同席詰としては異例の禄高であり、恐らく跡目と思われる(記事日付慶應三年七月)。なお「柳澤五郎右衛門慶応四年御用留」二月二日条に同人と印藤

別書・丹羽與太夫の屋敷三角替記事があり、この間の事情が窺える。

6

郡代

郡代並

禪宗麻布一本松臺雲寺

a 百石御役料共

幸田友之進

(注) 分72に郡代並七十石江戸勤「辰四十七」とある。文久二年三月迄は「民部少輔様御用人御附人・御入ケ向引受」と記されている。

御留守居役

御用達並

b 一、三人扶持御役料二十俵 渡辺多門

(注) 分20に寄合衆二百七十石国許勤「辰四十三」とある。記事日付元治二年三月帰郡までは2e渡辺曹藏の部屋住み出仕か。

御弓鉄砲頭

浄土宗浅草新寺丁行安寺

c 二百石御役料共

新井弥左衛門

(注) 分80に御持頭二百十石御役料百二十俵国許勤(京都留守居兼)「辰四十二」とある。記事日付は元治元(1865)年二月で、帰郡の上で當時重要性を増していた京都留守居に起用されたと見られる。「保申家記」でも新政府との折衝役となっている。

禪宗赤坂種徳寺

d 貳百石同共

田澤武右衛門

(注) 分38に御番頭二百石御役料五十俵江戸勤(表御用人・寺社方御用達)「辰五十五」とある。

7

禪宗谷中善光寺坂玉林寺

御年録方

a 百五十石

池沢次郎兵衛

(注) 分230に御側詰八十二石国許勤(池沢久之助)「戌十七」があるが関係不詳。

法花宗三田小山圓徳寺

b 七十五石御役料共

小澤清左衛門

(注) 分104御弓鉄砲頭七十石御役料十五俵江戸勤(武田舜山様御附人)「辰五十」とある。(前職武田左京太夫様御附人)。高家武田左京太夫信之は、藩主保光の七男で文久二年十二月出家して舜山と称している。

(注) 分に示される身分席次(役職)区分では、御用達から御弓鉄砲頭迄については所謂上級武士として「従是以上独礼」としている。

主な席次(役職)は「御用達、大目附、郡代、町奉行、御留守居役、御弓鉄砲頭」である。なお「独礼」とは藩主に単独拝謁可能な身分を言い、集団での拝謁においても、直答出来るのは原則としてこれ以上の身分に限られていた。分収録数は46名、本書収録は11名である(寄合並以下御使番までの15名は除外)。

御近習取次役

法花宗谷中本行寺

c 六十五石御役料共 萩原鉦五郎

(注) 分140御近習取次役三人扶持御役料十五俵江戸勤萩原豊太郎「午十四」が記されており、おそらく跡目と思われるが詳細不明。

禅宗渋谷祥雲寺塔頭靈泉院

d 六十五石同共 林 鎌太郎

(注) 分64大目附九十石御役料四十俵国許勤(文学武芸御用掛)「辰二十九」とあり、記事日付元治元年十月となっている。同一人であれば、かなり大幅な出世といえよう。

## 御目付

法華宗浅草田畝慶印寺

駒込御留守居兼宗門御用掛

e 九十五石御役料共 久城壮輔

(注) 分63に大目附(御留守居役)百石御役料二百俵久城壮輔「辰四十二」とあり、2c御用人準輔の縁戚と思われる。他記録においては江戸留守居役として記されている。

法華宗下谷池之端覚性寺

同前

f 九十五石同共 高田勝彌

(注) 分102に寄合並七十六石江戸勤「辰六十二」(貢蔵)があるが関係不詳。

禅宗本所中之郷原庭福嚴寺 芝留守居・武藝御用掛

g 船田修蔵

(注) 分76に御用達並九十七石御役料五俵国勤(御供方御刀番)「辰三十六」文久三年十二月とあり、本件石高不記の理由不明だが、本項はこの時期以前に記されたか。

日蓮宗深川浄心寺

同 学問御用掛

h 百石 吉田良之進

(注) 分75に御留守居役二百石御役料百俵江戸勤「辰二十九」とあり、記事日付が万延二年二月となっているので、この時期に芝留守居からの異動加増があつたのであれば、本項作成は万延二(1861)年以前となる。文久三年の真華院道中記でも留主居役として記載。

8

浄土宗小石川嚴浄寺

同前

a 九十石御役料共 篠崎傳右衛門

(注) 分120に御側御用人四十石御役料五十俵江戸勤(中奥勤)「辰四十」とある。

法華宗浅草実相寺

御馬御用掛

b 百十石御役料共 津田市郎左衛門

(注) 分に見当たらず。或いは286御馬廻組八十二石津田鏢四郎「丑十七」が縁戚か。

同助

c 一、三人扶持御役料十五俵 稲野多蔵

(注) 分56に御鍵奉行三百石江戸勤稲野多蔵「辰三十一」とある。これは慶應三年十月記事であり、本項当時は5稲野覚右衛門の部屋住か。



禅宗浅草海禅寺地中霊梅軒 駒込留守居兼役・武藝御用掛

d 六十九石御役料二十俵 杉浦文左衛門

(注) ①109に寄合並六十八石御役料二十二俵「辰四十五」とあり、前職「真華院様附」

## 郡代格

御普請奉行

御勘定奉行

浄土真宗四ツ谷南寺丁西應寺

e 四十五石御役料二十俵 壺井對助

(注) ①65に郡代並六十五石御役料四十俵江戸勤「辰六十一」とあり、記事日付が万延元年九月となっている。何れにしても禄高が合わず、さらに以前に「格から並」に昇進加増が窺える。

天台宗浅草閻魔堂華徳寺

f 六十石御役料二十俵 庄司宇兵衛

(注) ①164に郡代格五十石御役料三十俵御勘定奉行兼役江戸勤「辰五十」とある。

日蓮宗麻布宮村丁本光寺

g 七十石御役料共 河野庫三

(注) ①137に御使番五十石（御年録方兼）江戸勤「辰五十五」とある。「真華院道中」に御駕籠脇として随行。七十石は御役料二十俵合算と思われ、本書では散見される。

9

## 御書院詰

禅宗谷中興禅寺

a 四十石御役料十俵 吉田権十郎

(注) ①125に御使番四十石御役料三十俵江戸勤「辰四十六」吉田恒右衛門（権十郎）とある。文久元年九月役料加増か。

禅宗下谷坂本天龍寺 解龍流師範御乗方

b 六十一石御役料二十俵 中村新八

(注) ①該当者不明。解龍流は古式馬術の流派。

法華宗麻布□□丁妙経寺 御納戸御用役

c 百二十石 明石藤太

(注) ①186に御書院詰百二十石御役料十俵江戸勤（御納戸御用役兼・御武具奉行兼役）「辰五十二」とある。□部分は「桜田」か。

禅宗下谷坂本正洞院

d 四十石御役料三十俵 加藤理助

(注) ①該当者不明

浄土宗麻布櫻田丁専称寺

e 五十石 岡村蔵太

(注) ①127に御使番六十石江戸勤「辰三十六」とある。記事日付元治元年五月迄（駒込御留守居兼役・武芸御用掛）で御役料四十俵とある。

浄土宗三田寺丁長松寺 御奥御添役

f 五十六石御役料五俵 松本丹治

(注) ①119に御側御用役五十六石御役料二十四俵江戸勤(中奥勤)「辰五十八」がある。元治二年三月に御役料が増加されている。

禅宗小石川大塚高源院 同役

g 四十五石御役料十俵 藤田藤蔵

(注) ①187に御書院詰五十石御役料十俵「辰五十三」があるが、国許勤となっている。記事日付は安政三年四月であるが、何故に本項が江戸詰のままになっているのか不詳。

天台宗谷中金嶺寺 御簾役

h 五十石御役料二十俵 阿部軍内

(注) ①189に書院詰四十石御役料二十俵江戸詰(御簾役兼)「辰三十八」とある。記事日付は文久二(1862)年三月であり、これは継名ではなく同一人と思われるので、何故か減石されたことになるが、本項は無理矢理加筆した形跡があり事情は不詳。

法華宗牛込高田感通寺

i 四十石御役料十俵 矢作金石衛門

(注) ①171に普請奉行四十石御役料四十俵江戸勤「辰五十五」とある。記事日付は文久二年八月前職「御徒頭兼」であり、この期に普請奉行昇進御役料増加となったか。

浄土真宗築地本願寺地中真教寺 御納戸御用役

j 四十石御役料十二俵 杉山左五兵衛

(注) ①142に御目付五十八石御役料三十七俵国許勤(宗門改御用掛)「辰三十九」とある。記事日付は万延元(1860)年十一月でありこの期に帰郡

か。

浄土真宗築地本願寺地中延徳寺 御奥御添役

k 八十石御役料五俵 太田撰

(注) ①188に御書院詰八十石御役料十俵国許勤「辰四十四」とある。記事日付は安政五(1858)年前職「御添役」御役料五俵とある。

10

御書院詰小普請

禅宗麻布渋谷大安寺 彰太郎様御用人

a 五十石御役料二十俵 阿部一左衛門

(注) ①168に郡代格五十五石御役料二十俵江戸勤(御年録方兼)「辰五十九」とある。記事日付慶応元年十月迄(彰太郎様御用人、御附人、御入ヶ向引受)とあるが、何故小普請なのだろうか。

禅宗四ツ谷塩丁龍昌寺 御書札改役

b 四十石御役料十五俵 上田四郎治

(注) ①168に郡代格四十五石御役料二十俵江戸勤(御書札改役兼)「辰四十九」とある。記事日付同じく慶応元年。

浄土宗浅草誓願寺地中宗圓院 御乗方

c 四十五石御役料十五俵 深澤滝之丞

(注) ①167に郡代格五十石江戸勤(乗方兼)「辰五十一」とある。記事日付元治元年。

浄土宗芝増上地中月界院 お料理方

d 五十石御役料十五俵 石原幸次郎

(注) ④該当者不明。分255の松之間席四十五石石原織蔵「辰四十」が、「真華院道中」の料理人助勤として随行しており、縁戚かも知れない。

禅宗四ツ谷鮫ヶ橋發昌寺

e 六十六石御役料十俵 小柏鴻叔

(注) ④206に御書院詰小普請七十六石勤料十五俵国許勤(本道針医兼奥)「辰四十一」とある。医師の多くが御書院詰小普請と記されている。記事日付弘化三(1847)年。

11

法花宗本所法恩寺

a 五十五石勤料二十俵 熊澤了岱

(注) ④206に同じく五十五石勤料二十五俵国許勤(外科本道兼)「辰四十九」とある。

禅宗牛込榎丁宗参寺

b 九十石 戸田立賢

(注) ④206に同じく百石勤料五俵江戸勤(本道奥)「辰三十五」とある

御徒頭

禅宗小日向林泉寺

c 四十五石御役料二十俵 岩田作右衛門

(注) ④117に寄合並四十五石御役料二十俵江戸勤「辰五十二」とある。御徒頭と寄合並では、差がありすぎるように思うが、何か事情があったのか。

禅宗駒込土物店龍光寺

d 四十石御役料二十五俵 塙 亘

(注) ④341に大小姓並四十石国許勤 塙角蔵「申十七」があるが、関係不詳。

御廣式御用達

(注) ④での身分席次(役職)区分では、御近習取次役から御広式御用役迄については、上級武士に準ずる者として「従是以上御家老衆支配」としている。主な席次(役職)は「御近習取次役、御目付、御普請・勘定奉行、御書院詰、御徒頭等」である。④収録数は147名、本書収録は47名であり比率が高い(寄合衆以下15名を含む)。

御番方組頭

浄土宗浅草新寺丁新光明寺

e 四十石御役料二十俵 由良左司馬

(注) ④161に御目付(芝御屋敷御留主居兼役)四十五石御役料五十俵江戸勤「辰三十五」とある。

f 三人扶持御役料五俵 奥村紀多司

(注) ④160に御目付三人扶持御役料十五俵(駒込御屋敷御留主居兼役、御武具奉行兼役)辰三十四」とある。3b奥村駿助の縁者か。

12

御側詰

法花宗本郷丸山本妙寺地中圓立院

a 四十石御役料十五俵 大多和鍵藏  
(注) ②334に松之間詰四十石御役料十俵「辰三十二」とある。

b 禅宗高輪大圓寺地中門能院  
百二十石 鞍岡文次郎

(注) ⑤59に御奏者番百三十石国許勤「辰三十」とあり、もともと禄高が高い上士身分と思われるが、慶応二年四月迄は江戸勤「御供方御刀番兼」

c 三人扶持 北條織人

(注) ①114に寄合並三百二十石国許勤「辰四十」とある。1 i 御年寄北條弥一右衛門の縁者か。

d 浄土宗麻布善福寺地中善通寺

上野金吉

(注) ①198に御書院詰三百石国許勤上野伴助(金吉)「辰二十」がある、

禅宗下谷金杉了源院

e 六十七石 石川鎮平

(注) ②289に御馬廻組六十七石国許勤石川庄馬(鎮平)「辰二十一」とある。

浄土宗牛込馬場下誓閑寺

f 四十石御役料十俵 西倉鏘吉

(注) ①121に御側御用人四十石御役料三十俵国許勤西倉哈「辰二十三」があり、前職御供方御刀番兼」

g 三人扶持 滝 弥五郎

(注) ⑤54に御鍵奉行二百二十石江戸勤「巳二十二」とある。慶応三年迄は、

部屋住「御供方御刀番兼」か。

天台宗東猷山地中護国院

h 四十石御役料十俵 狩野糸太郎

(注) ①115に寄合衆六十石御役料九十俵江戸勤(彰太郎様御家老附人)狩野隼太(糸太郎)「辰二十六」とある。前職は「芝御屋敷留主居兼役、文学御用掛」。

松之間

13

浄土真宗築地本願寺地中淨泉寺

a 畔柳新兵衛

(注) ②209に御徒頭六十三石江戸勤「辰四十六」とある。記事日付は文久二年九月であり、禄・扶持が書かれていない理由不明。

禅宗市ヶ谷洞雲寺 御使者番

b 四十石御役料二十五俵 中村段七

(注) ②216に御番方組頭四十石御役料三十俵江戸勤「辰四十四」とある。記事日付の万延二年迄、御使者番兼役。

禅宗下谷龍谷寺 同勤

c 同 石川治助

(注) ①188に御書院詰六十石御役料三十俵江戸勤(御使者番兼役)石川直記(治助)「辰三十八」とある。文久元年十一月に加増されたか。

浄土宗芝下高輪淨業寺 同

d 四十石御役料十俵 横地藤治

(注) ②32に松之間詰四十石御役料十俵江戸勤「辰五十三」とある。

御使者番

e 一、三人扶持御役料十五俵 野口左織

(注) ①44に御目付三人扶持御役料十五俵江戸勤（芝御屋敷御留主居兼役）「辰二十八」とある。記事日付文久二年九月迄「御使者番兼役」、御番頭野口津盛の縁者か。

同勤

f 一、三人扶持御役料十俵 野崎鎌之助

(注) ①38に御使番六十石江戸勤野崎左兵衛（鎌之助）「辰三十五」とある。記事日付慶応三年五月迄三人扶持。3cの寄合並野崎左兵衛の縁者か。「役料」は原文「役役」を訂正した。

g 一、三人扶持 小澤武司

(注) ①97に御弓鉄炮頭百十石御役料九十俵国許勤小澤佐平治（武司）「辰三十五」があり、奥御用達「小澤傳左衛門」の跡目として帰郡したと思われる。

禅宗青山原宿村龍岩寺 御使者番

h 百十石 松田小宰司

(注) ①100に御弓鉄炮頭百十石御役料九十俵江戸勤「辰三十一」とある。慶応三年七月迄御使者番兼役。

相之間頭

i 三人扶持御役料十俵 松本寛之助

(注) ①196に御書院詰三人扶持御役料十五俵江戸勤御簾役兼「辰三十二」と

ある。慶応三年三月迄御供方相之間支配兼役。御書院詰松本丹治の縁者か。

14

a 三人扶持 畔柳法之進

(注) 13畔柳新兵衛の縁者とも思われるが詳細不明。

b 三人扶持 膳 吉之助

(注) ②23に松之間詰三人扶持御役料五俵国許勤「辰三十」とある。2の御用人膳 善太郎の縁者か、

禅宗下谷坂本天龍寺

c 四十石御役料十俵 中村逸平

(注) ②23に松之間詰四十石御役料二十五俵江戸勤（御使者番兼役）「辰三十」とある。

浄土宗芝伊皿子長安寺

d 同 榎木新一郎

(注) ③17に馬廻席四十石御役料十俵江戸勤（御書部屋兼役）「辰四十一」榎木閑輔があるが関係詳細不明。

禅宗谷中玉林寺

e 百五十石 渡部金之丞

(注) ②261に松之間席四十五石国許勤「辰三十九」渡部内蔵允（半之丑Ⅱ丞の誤記）があるが、そもそも松之間席の百五十石は禄高が異常。何らかの誤記か。

松之間詰小普請

## 松之間席

浄土宗芝増上寺地中月界寺

f 五十石御役料十五俵 乾 我聞

(注)分206に御書院詰小普請五十石勤料二十俵江戸勤(針医奥)とある。

浄土真宗麻布善福寺地中西福寺

g 四十五石御役料三俵 寺尾勇助

(注)分271に「勇之丞」松之間席四十三石御役料十俵江戸勤(武田舜山様御附人)「辰三十八」とあるが同一人か。武田舜山については、7b小澤清左衛門参照。

浄土宗麴丁九丁目心法寺 民部少輔御用人

h 四十五石御役料二十五俵 外谷文助

(注)分368に大小姓席四十石国許勤外谷健吉「未十七」があるが関係等不詳。

15

日蓮宗駒込千駄木圓成寺

a 四十五石御役料十五俵 河原文六

(注)分200に御書院詰五十石御役料十五俵江戸勤(御年録方兼役)「辰六十五」とある。

禅宗愛宕下青松寺地中吟窓院 留主居下役

b 四十石御役料十俵 川嶋又藏

(注)分388に大小姓席四十二石江戸勤「卯十七」川島鍾次郎があるが、関係等不詳。

浄土宗西久保大養寺

c 五十石 大橋順平

(注)分375大小姓席四十石御役料五俵国許勤「辰四十四」大橋帰一(清次郎)があるが関係等不詳。

法花宗浅草新寺丁本立寺 御書部屋

d 四十石御役料十俵 山田熊右衛門

(注)分に山田姓は多くあるが、関係不詳。

松之間小普請

大近習組

惣御医師

浄土真宗西久保光明寺

e 十五人扶持 植崎勾當

(注)分に惣御医師十五人扶持(針医見習奥)「辰四十六」とある。

御茶道

御医師並

日蓮宗南品川妙国寺

f 四十石御役料二十俵 笠原玄庵

(注)分207に御書院詰小普請四十五石勤料二十俵江戸勤(針医本道兼奥)「辰四十六」とある。

16

御納戸役

禅宗小石川稻荷谷林泉寺

a 四十石御役料五俵 和田豊蔵

(注) 分212に御徒頭四十石御役料二十俵江戸勤「辰三十七」慶応三年八月迄御納戸役勤とある。和田儀右衛門との関係不詳。

法花宗谷中妙雲寺

b 同 竹内隼之丞

(注) 分234に松之間詰四十石御役料十俵江戸勤(御納戸御用役兼、御武具奉行兼役見習「辰三十二」とある。

浄土宗浅草新堀端龍宝寺地中得受院

c 同 田中縫次郎

(注) 分に田中姓多く比定困難

浄土真宗三田臺丁神立寺

d 五十二石御役料五俵 岩崎亀太郎

(注) 分に該当者不明

## 御馬廻組

法花宗浅草新鳥越正法寺

e 五十四石 木口志津摩

(注) 分234に松之間詰五十四石江戸勤「辰三十四」とある。

日蓮宗本郷丸山浄心寺

f 四十石 鈴木学之助

(注) 分247に松之間詰四十石江戸勤「辰三十」とある。

法花宗小石川蓮花寺地中延壽院

g □ 志水鉦之助

(注) 分246に松之間詰四十石御役料・勤料各五俵江戸勤(御供方相之間支配兼役)志水利三郎があるが、同一人かどうか判然としない。「御供日記」参照。

h 三人扶持 高瀧小藤治

(注) 分143に御目付四十石五十俵江戸勤(芝御屋敷御留主居兼、宗門改御用掛)「辰三十七」とある。万延二年二月に家督相続同時昇進か。

17 禅宗四ツ谷南寺丁永心寺

a 四十石 小林鋼太郎

(注) 分小林姓多く比定困難。

b 三人扶持 村上文五郎

(注) 分232に御側詰三人扶持江戸勤とあるが、5b村上の縁者か詳細不明。

禅宗谷中天眼寺

c 百五十石 疋田喜太郎

(注) 分224に御側詰百五十石国許勤「辰十九」とある。かなり高禄だが詳細不明。

d 三人扶持 高田桂蔵

(注) 分368に大小姓席四十石国許勤高田勝蔵「申十七」があるが関係不詳。

e 浄土真宗小日向善仁寺  
六十石  
(注) 分比定困難。 清水準蔵

f 浄土宗浅草新堀端壽松院地中嶺林院  
五十石  
松本壽□助

(注) 分比定困難。 □は「鶴」の異体字か。

g 浄土真宗麻布一本松徳正寺  
四十石  
永井鑊三郎

(注) 分286に御馬廻組四十一石国許勤永井鑊三郎「巳十七」とある。

h □  
□  
和田鋌三郎

(注) 分286に御馬廻組六十一石江戸勤「巳十七」とある。

i 三人扶持  
萩原豊太郎

(注) 分比定困難。

j 三人扶持  
岩手銚之助

(注) 分比定困難。 5 f 岩手孫右衛門の縁者か。

k 日蓮宗谷中一乗寺  
四十石  
鳥羽重蔵

(注) 分286に馬廻組四十石江戸勤「午十七」とある。

浄土宗駒込肴丁十方寺

l 七十五石  
山本虎太郎

(注) 分286に馬廻組七十五石江戸勤「午十七」とある。

18

御馬廻組小普請  
御馬廻席

浄土宗下谷金杉安楽寺

a 四十石  
富塚團治

(注) 分比定困難

浄土宗四ツ谷鰻ヶ橋香蓮寺  
御次御賄役

b 四十石御役料十俵  
根岸熊之助

(注) 分250に松之間席四十石御役料十五俵江戸勤（御次勤）「辰四十三」とある。なお「鰻」は「鮫」を誤写したものかも知れない。

浄土宗駒込竹丁大運寺  
勘定衆組頭吟味方

c 四十石御役料十俵  
中村壮左衛門

(注) 分73に郡代並五十五石御役料四十五俵国許勤「辰四十一」とある。同一人であることを疑うほどの出世である。国許では勘定奉行。

禅宗駒込吉祥寺地中洞泉寺  
同

d 同  
浅野楽蔵

(注) 分比定困難。

禅宗芝二本榎黄梅院  
同

e 四十石御役料十二俵  
吉浦金右衛門



(注) 分272に松之間席四十石御役料二十俵江戸勤(御留主居下役兼)「辰二十八」とある。

禪宗麻布谷丁永昌寺

f 四十石 中嶋舷蔵

(注) 分276に松之間席四十石御役料三十俵江戸勤(伊勢守様御用人、御附人「辰三十七」とある。

浄土宗芝増上寺地中月界院

g 四十石御役料□俵 関口勝平

(注) 分に御勘定奉行四十石御役料三十俵江戸勤「辰四十四」とある。

法花宗市谷 御蔵方深川内堀

h 四十石御役料五俵 小林新二郎

(注) 分254に松之間席四十石御役料五俵江戸勤(御蔵御用兼役)「辰四十九」とある。

浄土宗三田大信寺 御用部屋御祐筆

i 四十五石御役料五俵 宮氏金十郎

(注) 分比定不能

19

禪宗市ヶ谷月桂寺

a 四十石 山崎應助

(注) 分301に馬廻席四十石御役料十俵江戸勤(武田大膳太夫様御附人)「辰三十八」とある。

御書部屋

b 三人扶持 上田瀧蔵

(注) 分245に松之間詰四十石江戸勤(御使者番兼役)上田与一郎「丑二十六」があるが関係不詳。記事日付は慶応三年、慶応元年十一月時点では御供方相之間支配兼とある。

法花宗麻布櫻田丁法登寺 御次御賄方

c 四十石御役料十俵 猪納鋳三郎

(注) 分302に馬廻席四十石御役料十五俵勤料五俵江戸勤(御次勤)「辰二十八」とある。記事日付は安政二年三月。この時期が正しいとすれば、本項は安政二年以前となる。なお「登」は「雲」を誤写したものか。

浄土宗四ツ谷南寺丁西念寺

d 五十四石 渡辺雄庵

(注) 分284に御医師並五十四石勤料十俵江戸勤(本道、外科兼)「辰二十六」とある。この記事日付は安政六年三月。

御料理方

e 三人扶持御役料□俵 石原織蔵

(注) 分255に松之間席四十五石国許勤「辰四十」がある。記事日付は文久二年四月。なお文久三年の真華院道中記に御料理人助勤として随行とある。□は十二か。

禪宗下谷新寺丁龍谷寺

f 四十石 古屋良佐

(注) 分303に馬廻席五十石江戸勤「辰五十五」とある。記事日付は安政二年

七月。

g 三人扶持御役料五俵 御年寄書役  
川嶋周治

(注) ③38に大小姓席四十二石江戸勤「卯十七」(鑓次郎)があるが同一人か。

h 浄土真宗麻布永坂光照寺 御買物方  
四十石御役料五俵 牧野多吉

(注) ③304に馬廻席四十石御役料十五俵江戸勤(御買物方兼役)「辰三十三」とある。記事日付安政三年三月。

i 浄土真宗麻布永坂光照寺 御蔵方  
四十石御役料五俵 竹中岩之助

(注) ③265に松之間席四十石御役料十俵江戸勤(御蔵御用兼役)「辰四十」とある。

j 禅宗駒込吉祥寺地中宗宝院  
四十石御役料十俵 伊藤幸八

(注) ③255に松之間席四十五石御役料十俵国許勤「辰四十八」とある。文久二年三月迄(真華院様御賄役兼とあり、随行帰郡したものか。

k 法花宗深川浄心寺地中一乗院 舜山様附  
四十石御役料十俵 富永喜三郎

(注) ③206に御書院詰四十五石御役料二十五俵江戸勤(彰太郎様御用人、御附人、御入ケ向引請)富永良右衛門(喜三郎)「辰三十二」とある。

禅宗牛込原丁大龍寺

a 四十石御役料十俵 中野守馬

(注) ③307に馬廻席四十石御役料十五俵江戸勤(書替役兼)「辰二十四」とある。安政五年六月迄武田左京大夫様御附人。慶応三年御供日記では五月御先相之間に任命。

b 浄土宗浅草新寺丁善徳院地中春翁院  
八十石 大波東銓

(注) ③307に馬廻席八十二石国元勤(本道)「午十七」があるが、サンズイに全となっている。石高の類似から同一人と思われるが確認は困難。

御馬廻小普請  
御徒目付組頭

c 浄土真宗浅草新堀端正行寺 御厩目付  
四十石御役料十俵 大森東三郎

(注) ③317に馬廻席四十石御役料十五俵江戸勤(御徒目付組頭、御厩目付兼)「辰四十一」とある。

大小姓組

d 浄土宗小日向臺丁大圓寺  
四十石 櫻井鋭太郎

(注) ③341に大小姓組四十石江戸勤「辰十七」とある。慶応三年「御供日記」に御供方助勤任命の旨記述あり。

20

法花宗下谷宗延寺

e 四十石 山口忠吾

(注) ④341に大小姓組四十石江戸勤「辰二十一」とある。

浄土宗駒込蓮光寺

f 四十石 喜多野勝五郎

(注) ④361に大小姓組四十石江戸勤(銃五郎)「酉二十一」があり、恐らく同人と思われる。

禅宗下谷坂本曹源寺

g 四十石 横田大助

(注) ④341に大小姓組四十石江戸勤「戊十七」があり同人名。

法花宗下谷池之端妙顕寺

h 四十石 穴澤竹蔵

(注) ④347に大小姓組四十石御役料五俵江戸勤「辰三十九」とある。

21

禅宗駒込千駄木拾禪寺

a 四十石 栗田拾之助

(注) ④144に御目付四十石御役料五十俵江戸勤(駒込御屋敷御留主居兼役)「辰三十」とある。役料共の石高が倍増の昇進であるが、記事日付は文久元年八月とある。

御乗方

b 三人扶持 中村喜佐之進

(注) ④234に松之間詰四十五石国許勤(御乗方)「辰二十六」とある。記事日付は元治元年九月で、この時点で跡目相続・国許転勤したものか。

c 四十石 石井権之丞

(注) ④221に御番方組頭四十石御役料十五俵勤料五俵江戸勤「辰三十二」とあり、かなりの昇進を遂げている。但し御番方組頭は松之間詰と御書院詰の中間に位置する中級身分。

禅宗浅草内原丁金龍寺

d 四十石 渡辺良之助

(注) ④比定困難

日蓮宗駒込長元寺

e 四十石 上田丹右衛門

(注) ④168に郡代格四十五石御役料二十俵江戸勤(御書札改役兼)「辰四十九」の四郎治があるが、同一人判定は困難。

浄土真宗浅草新寺丁入楽寺

f 百石 竹本源助

(注) ④61に御奏者番百石御役料三十俵国許勤(銃隊奉行並)「辰三十一」とある。御奏者番は大目附・郡代・町奉行より上位の重臣(独礼)であり、この昇進は常識の範囲を超えている。記事日付は慶応三年八月であるが、前職は「御使者番兼役」で、やはり目付や勘定奉行より上位にある。

法華宗赤城明神下清隆寺

g 四十石 伏木兼助

(注) ④341に大小姓組四十石江戸勤「辰三十九」とある。

禅宗市ヶ谷月桂寺

h 四十石 藤田豊蔵

(注) 分中8に相之間三十五石江戸勤「辰二十」とある。記事日付では文久元五月迄四十石であり異例の降格・減石か。

i 四十石 小出常三郎

(注) 分124に御側御用役四十石御役料三十俵国許勤(御供方御刀番)「辰十八」とある。記事日付は慶応二年七月で、若年にして異例の昇進である(本来御刀番は国許では必要だが、將軍在京に伴い必要となったものか)。

j 六十石 村井鍵之輔

(注) 分381に大小姓席六十七石江戸勤「辰二十」とある。比較的石高が大きい。

k 四十石 大槻鉄蔵

(注) 分341に大小姓組四十石江戸勤「辰三十九」とある。

l 三人扶持 御乗方

河野直次郎

(注) 分297に馬廻組三人扶持御役料十五俵江戸勤(御乗方)「辰二十九」とある。本書8g河野省三の縁者か。なお「御乗方」は馬術調練のこと。

22

浄土宗麻布六本木正保寺

a 百二十石 大野嘉二郎

(注) 分225に御側詰百二十石国許勤「辰十八」(嘉次郎)があり、記事日付は

慶応二年四月となっている。元々異例の石高から見ても、この人物が国許勤して昇進したと思われるが、分311に馬廻席四十石御役料十五俵江戸勤(御書部屋兼役)「辰二十七」(鉦三郎)もあるので一応あげておく。なお「辰」は「信」の誤写か。

b 五十石 山寺金三郎

(注) 分341に大小姓組四十石勤料五俵江戸勤(銃隊組頭兼)「酉二十」(三郎)があり、おそらく同一人であろう。

c 七十五石 坪井吉三郎

(注) 分238に松之間詰七十五石江戸勤(遠近御使者番御取次兼)「辰十七」とある。

d 八十二石 谷澤鉦之助

(注) 分344に大小姓組七十二石江戸勤「辰二十六」(慎吾)がある。元治二年に減石が記されている。

浄土宗麻布白金西光寺

e 四十石 池田八十五郎

(注) 分234に松之間詰百八十石国許勤「戌十七」(八十次郎)があるが、石高が違いすぎる(別人或いは本書誤記か)。なお記事日付は文久二年九月となっている。

禪宗浅草新堀心月院

f 四十石

吉田善助

(注) ③41に大小姓組四十石江戸勤「午十九」(善介)とある。

### 大小姓組小普請

天台宗小石川小原丁龍泉寺

g 四十石

宮川榮蔵

(注) ③41に大小姓組四十石江戸勤「辰十」とある。かなり若年で跡目相続したようであるが十歳はどんなものか。

### 大小姓席

禪宗西久保俊朝寺

h 四十石

樫木閑輔

(注) ③17に馬廻席四十石御役料十俵江戸勤(御書部屋兼役)「辰四十一」とある。

浄土宗駒込富士前丁天然寺

i 四十石

太田八十平

(注) ③54に大小姓席四十石江戸勤「辰三十八」とある。記事日付が天保三(1832)年十二月と古く、中奥附勤御役料十俵が召し上げになっている。

23

浄土宗芝増上寺地中浄蓮院 御徒目付

a 四十石

高木慎三郎

(注) ③38に大小姓席四十石江戸勤「辰二十七」とある。慶応三年五月迄御役料五俵(支配方大目附御目付)とあるので、この時点で徒目付けから転任か。

浄土真宗駒込西善寺

b 四十石

大野鉦三郎

(注) ③11に馬廻席四十石御役料十五俵江戸勤(御書部屋兼役)「辰二十七」とある。記事日付は万延元年閏三月。

日蓮宗市ヶ谷妙典寺

御次勤

c 四十石御役料五俵

高橋一太郎

(注) ③34に馬廻席四十石御役料五俵江戸勤「辰二十五」(高橋伝)とある。慶応二年五月迄御次勤とある。

浄土宗西久保天徳寺地中浄桂院 御奥御広式兼

d 四十石

関根裕八

(注) ③25に馬廻席四十五石御役料五俵国許勤「辰三十二」とある。慶応元年七月帰郡と思われるが、前職は書かれていない。

浄土宗増上寺地中貞松院 御賄役

e 四十石御役料五俵

富山数右衛門

(注) ③08に馬廻席四十五石御役料十俵江戸勤(御金小弘方兼役)「辰三十三」(政右衛門とも)とあり、安政六年五月迄、御賄役<sup>并</sup>御道具方兼役とある。

浄土真宗麻布永坂光照寺

f 四十石御役料五俵 海野三津之助

(注) 分332に馬廻席四十石御役料五俵江戸勤(柳澤孫左衛門様御附人)「辰五十一」とある。孫左衛門は「真華院道中記」や「家譜附録」等に記されているが詳細不明。分207に「御賄料」として二十人扶持(九十俵相当)が支給されている。

浄土真宗麻布永坂光照寺 御賄役

g 四十石御役料五俵 伊藤完次郎

(注) 分313に馬廻席四十石御役料十俵江戸勤(御金小払方兼役)「辰三十」とあり、文久二年正月迄、御賄役并御道具方兼役とある。

真言宗巢鴨真性寺 御徒目付

h 四十石 間宮金治

(注) 分376に大小姓席四十石江戸勤「子十七」(久吉)があるが、比定は困難。

浄土宗本駒込大運寺 本遊院様御附

i 四十石 原田郡五郎

(注) 分373に大小姓席四十石国許勤「戌十七」(養五郎)があるが、前職記事もなく比定困難。

禅宗本郷迫分満蔵寺 御奥勤

j 四十石 黒木清三郎

(注) 分369に大小姓席四十石江戸勤「申十七」(錯之進)があるが比定困難。なお「満」は「海」の誤写か。

法花宗小石川本念寺 御中間頭

k 四十一石御役料十俵 柏田圓左衛門

(注) 分313に馬廻席四十一石御役料十五俵江戸勤(勘定衆組頭兼役)「辰四十四」とある。記事日付は万延元年十月で、前職は(中間頭兼役)となっている。

24

浄土宗下谷金杉安樂寺

a 四十石 金子種吉

(注) 分358に大小姓席四十石江戸勤「辰十五」とある。

禅宗市ヶ谷四丁洞雲寺

b 四十石 加治亥之八

(注) 分383に大小姓席四十石江戸勤「辰二十二」前職(御次勤)とある。

浄土宗駒込富士前丁天然寺

c 四十石 松井勇吉

(注) 分358に大小姓席四十石江戸勤「辰十六」とある。

浄土宗芝増上寺地中月界院 御徒目付

d 四十石 平井求馬

(注) 分270に松之間席五十石御役料十俵江戸勤(銃隊組頭兼)「辰二十七」とある。「元治二年大庄屋記録」116に留主居役吉田良之進下役として郡山藩庁に出向いている。

浄土真宗麻布善福寺地中西福寺 同

e 四十石 古川周三

(注) 分340に御徒目付組頭四十石御役料五俵江戸勤(御厩目付兼役)「辰二十

五」(徳次郎とも)とある。慶応二年二月迄、御徒目付勤となっている。

日蓮宗麻布宮村丁本光寺

f 四十石 吉野庸太郎

(注) ③59に大小姓席四十石御徒(役)料五俵江戸勤「辰二十三」とある。

日蓮宗麻布宮村丁本光寺 中奥附

g 四十石御役料十俵 永井新治

(注) ③63に大小姓席四十石御役料十俵江戸勤(前職中奥勤)「辰二十七」とある。記事日付は嘉永五(1852)年である。役料は十一俵かも知れない。

浄土真宗本郷追分専西寺

h 四十石 高田源吾

(注) ③に高田姓は多数あるが比定困難。

左京太夫様附

i 三人扶持御役料五俵 寺尾勇之丞

(注) ②71に松之間席四十三石御役料十俵江戸勤(武田舜山様御附人)「辰三十八」とある。記事日付は慶応二年四月で、この頃家督相続と共に松之間へ昇進と思われる。

浄土宗三田寺丁随應寺 御次勤

j 四十石 田村小治郎

(注) ③39に馬廻席四十石御役料五俵江戸勤(中間頭兼役)「辰二十一」(尉之助又小次郎)とある。

25

浄土宗増上寺地中月界院

a 四十石 青柳利兵衛

(注) ③34に馬廻席四十石御役料十俵江戸勤(伊勢守様御附人、吟味役頭取)「辰五十」とある。

真言宗浅草新寺丁本知院 御書役

b 四十石 宮川又四郎

(注) ③39に馬廻席四十石御役料十俵江戸勤(御賄役并御道具方兼役)「辰二十九」(新七郎)とある。前職は書替役兼となっている。

浄土真宗西久保光明寺 番頭書役

c 四十石御役料五俵 若山武兵衛

(注) ③63に大小姓席四十石御役料十俵江戸勤(御賄役并御道具方兼役)「辰三十一」とある。記事日付は嘉永七(1854)年閏七月とあり、本書はこの時に遡るものか。

御書替

d 三人扶持 河原文之助

(注) ③63に大小姓席三人扶持御役料十俵江戸勤(中間頭兼役)「辰二十八」とある。記事日付は安政二年六月である。

浄土真宗麻布一本松徳正寺

e 四十石 堀内陽之助

(注) ③63に大小姓席四十石国許勤「辰十八」とある。安政二年には帰郡している。

禅宗浅草新寺丁東岳寺

f 四十石

阿部亀三

(注) 本書は阿部家文書であるが、この阿部姓の人物は份に見当たらない。

日蓮宗麻布宮村丁本光寺

御書部屋

g 四十石

相川庄蔵

(注) 份269に松之間席四十石御役料十俵江戸勤(御書札改役兼)「辰三十二」とある。

法花宗小石川白山蓮花寺地中延壽寺 御徒目付

h 四十石御役料五俵

今田七郎

(注) 份202に御書院詰七十石江戸勤「辰三十八」とある。身分・石高共に異例の昇進であるが、何故か職歴等が記されていない。

法花宗小石川小原丁本念寺

i 四十石

尾澤鉦太郎

(注) 份364に大小姓席四十石国許勤「辰十七」とある。記事日付の安政三年十月に帰郡か。

禅宗本郷六丁目喜福寺

j 四十石

金丸鍵太郎

(注) 份366に大小姓席四十石国許勤「午十七」とある。記事日付の安政五年には帰郡か。

26

日蓮宗麻布宮村丁本光寺

御金方

a

四十石御役五俵

牧野伊兵衛

(注) 份331に馬廻席四十石御役料十俵江戸勤(御買物方兼役)「辰四十八」とある。記事日付の慶応二年四月迄は三十五石とあり、徒目付身分であったか。

大小姓席小普請

禅宗黄檗派目白洞雲寺

b

龍華庵大樹

(注) 份に記載なし。おそらく駒込六義園内龍華庵の住職のような者か。

大小姓並

浄土真宗駒込片丁一音寺 御奥料理方

c

三十五石御役料五俵

深町留五郎

(注) 份327に馬廻席四十石御役料十俵国許勤「辰三十四」とあり、文久三年の真華院帰郡道中に御料理人として随伴している。

法花宗大塚本傳寺地中圓陳院 中奥御賄方

d

三十五石御役料五俵

牛田名之助

(注) 份389に大小姓並三十五石御役料十五俵国許勤(御次勤)「辰四十」とある。記事日付は安政三年七月で、この頃に帰郡か。なお「陳」は「珠」の誤写か。

禅宗麻布谷丁永昌寺

御留主居下役手伝

e

三十五石御役料五俵

小嶋有次郎



(注) ③86に大小姓席四十石江戸勤「寅十七」(朋次郎)とある。記事日付は慶応二年十月であるが、この「寅十七」が慶応二年の「丙寅」とすれば、本書の成立時には十二・三歳となり、判断が難しい。

浄土真宗麻布永坂光照寺 御年寄内書役

f 三十五石 磯田直次郎

(注) ③21に馬廻席四十石御役料十俵勤料五俵江戸勤(御用部屋附)「辰二十四」とある。記事日付は元治元年十月で、この時に身分・石高共に昇進したもののか。

禅宗市ヶ谷月桂寺

j 三十五石御役料五俵 椿 義三郎

(注) ③38に馬廻席四十石御役料十俵江戸勤「辰二十九」とある。記事日付は慶応三年六月で、この時に身分・石高共に昇進したもののか。なお前職は書替役兼。

27

## 大小姓並小普請

a 小林雅次郎

(注) ③89に大小姓並三十五石国許勤「辰十口」とある。記事日付は安政三年十月であり、この時に帰郡したものか。

(注) ④での身分席次(役職)区分では、御家老から大小姓並迄については、所謂「御目見身分(幕臣であれば旗本)」として「従是以上 月並御祝儀、御屋形<sup>江</sup>出仕、伺御機嫌」としている。

主な席次(役職)は銀馬代・独礼に次で「御番方組頭、松之間、大近習組、

御馬廻、御徒目付、大小姓」であり、全体が「御分限帳 上」に収録されている。④収録数は549名、本書収録は140名であり、やはり比率が高いように思う。なお以上「御目見藩士」の合計は、④収録数810名、本書収録は216名であり、時期がずれているものの概略四分の一が江戸勤であると言えよう。

## 御徒目付

真言宗染井西福寺

b 三十五石 平野美之助

(注) ③86に大小姓席四十石御役料五俵江戸勤(御供目付兼役)「辰三十四」とある。

法花宗谷中大圓寺

c 三十五石 三木斑三

(注) ③41に大小姓組四十石江戸勤「辰三十」とある。記事日付の文久元年十二月迄、御次勤か。

## 相之間

日蓮宗麻布宮村丁本光寺

d 三十五石 渡辺幸蔵

(注) ④比定困難。

禅宗飯倉瑠璃光寺 御帳役

e 三十五石御役料五俵 生田藤五郎

(注) ④407に大小姓並三十五石江戸勤(御書部屋兼役)「戊二十六」(銀作)

があるが同一人か。

浄土真宗麻布谷丁西光寺

f 三十六石 原 幸之丞

(注) 分中1に御徒目付三十五石江戸勤「辰二十二」とある。

浄土真宗麻布永坂光照寺 御用部屋詰番

g 三十石 石渡銀蔵

(注) 分中13に相之間三十五石江戸勤「寅十七」(邑治)があるが比定は困難。

禅宗深川七軒寺丁増林寺 御奥広式目付

h 三十五石御役料五俵 牧野藤太郎

(注) 分399に大小姓並三十五石国許勤「辰五十四」とあるが、記事日付の元治元年三月に帰郡か。

浄土真宗麻布善福寺地中西福寺

i 三十石 丸山八左助

(注) 分比定困難

日蓮宗麻布宮村丁本光寺 本遊院賄

j 三十五石勤料五俵 藤枝久助

(注) 分比定困難

日蓮宗麻布宮村丁本光寺 御用人御詰役兼

k 三十五石勤料五俵 岩橋藤十郎

(注) 分333に馬廻席四十石御役料五俵江戸勤(御用人支配之方世話役兼)「辰五十三」とある。記事日付の慶応二年四月に長期勤続による昇進か。

28

禅宗浅草海禅寺地中霊梅軒 中奥附

a 三十二石勤料五俵 杉浦岩輔

(注) 分中7に相之間三十五石国許勤(御奥御用達附)「巳十九」とある。安政四年四月に帰郡か。

日蓮宗麻布宮村丁本光寺 時計間組頭

b 玉越友次郎

(注) 分334に馬廻席四十石御役料十俵江戸勤(伊勢守様吟味役勤御附人)「辰四十一」とあり、堂々たる士分に昇進している。同人は慶応元年「水原出府日記」にも御附人として記されている。なお伊勢守は黒川藩主光昭で柳澤保泰十男。

禅宗麻布谷丁永昌寺 □□(左京大夫)<sup>カ</sup> 様附

c 三十五石勤料十五俵 長尾周平

(注) 分340に馬廻席四十石御役料十俵江戸勤(武田舜山様御附人)「辰五十六」とあり、前職も武田左京大夫様御附人となっている。これも長期勤続昇進か。

相之間小普請

禅宗麻布谷丁永昌寺

d 三十五石 中村金太郎

(注) 分中7に相之間三十五石国許勤「辰□」とある。記事日付は嘉永四年十一月とあり、そのころには帰郡か。

勘定衆

浄土真宗麻布善福寺地中善正寺

e 三十五石 高梨甚八

(注) 分中7に相之間三十五石勤料五俵江戸勤(中奥附勤)「辰二十六」とある。

法花宗麻布櫻田丁法雲寺 御用部屋詰番

f 三十五石 塙 栄三郎

(注) 分中38に大小姓席四十石御役料十五俵江戸勤(書役兼)「辰二十五」とあり、慶応三年六月昇進か。

天台宗牛込横寺丁正藏院

g 三十五石 金枝栄之進

(注) 分中27に相之間三十五石江戸勤「辰十六」とある。

浄土宗麻布三光坂西光寺 八丁堀

h 御茶道三十五石 武知元秀

(注) 分中37に相之間小普請三十石江戸勤(本道、外科兼)「辰三十二」とある。文久三年十二月に御茶道解任により減石か。

29

禅宗四ツ谷北寺丁全長寺 四ツ谷塩丁

a 五人扶持 横手貞碩

(注) 分中10に相之間三十五石江戸勤(本道、外科兼)「辰五十」とある。

浄土宗浅草新堀龍宝寺地中西光院

b 三十五石 緒形銀八

(注) 分中17に勘定衆三十五石国許勤「辰十九」とある。嘉永七年五月に帰郡か、

時宗浅草日輪寺

c 三十五石勤料五俵 御廣式番 永田八兵衛

(注) 分中8に相之間三十五石勤料五俵国許勤「辰五十二」とある。文久元年四月に帰郡か。

禅宗芝岸丁光宝寺

f 三十五石勤料五俵 御年寄方書役 高田兵右衛門

(注) 分中385に大小姓席四十石江戸勤「辰三十二」とある。慶応二年四月迄勘定衆(書役兼)か。

日蓮宗牛込神楽坂善国寺

g 三十五石 内田米吉

(注) 分中18に勘定衆三十五石勤料五俵江戸勤「巳十七」とある。

浄土宗赤坂一ツ木浄土寺

h 同 井上嘉七郎

(注) 分中19に勘定衆三十五石江戸勤(中奥附勤)「巳二十二」とある。

浄土宗天徳寺地中

i 三十石 松崎銀太郎

(注) 分中41に御徒士三十石国許勤「巳十七」とある。安政六年二月に帰郡と共に一旦三十五石に加増された分五石が減石か。

勘定衆小普請  
勘定衆並

浄土真宗駒込三ツ家丁西善寺 時計之間組頭

j 三十石勤料五俵 杉山宗如

(注) 分中19に勘定衆三十五石勤料十俵江戸勤(御茶道兼奥)とある。安政六年六月迄江戸坊主組頭兼役。

禅宗高輪臺丁保安寺 御勘定奉行書役

j 三十石勤料五俵 吉田 貢

(注) 分中27に勘定衆三十五石勤料十俵江戸勤(書役兼)「辰三十一」とある。前職は記されていない

日蓮宗下谷大久寺

k 三十石勤料五俵 戸田八五郎

(注) 分中28に勘定衆三十五石勤料五俵国許勤「辰四十四」とある。慶応三年八月に帰郡か。

30

禅宗麻布谷丁永昌寺 大目附書役

a 三十石勤料五俵 遠藤卷右衛門

(注) 分中14に勘定衆並相之間三十五石勤料二十俵江戸勤(伊勢守様御付人吟味役)「辰四十一」とあり。かなりの加増をうけている。

浄土宗市ヶ谷指ヶ谷丁浄善寺 御廣式目付

b 同 川辺左馬蔵

(注) 分中24に勘定衆三十五石勤料五俵国許勤「辰四十二」とある。慶応元年七月に帰郡か。

御徒士

浄土宗駒込千駄木光源寺

c 三十石 牧野紋右衛門

(注) 分中405に大小姓並三十五石御役料五俵江戸勤(中奥附勤)「辰三十四」とあり、慶応元年十月に昇進・帰郡かと思われる。

禅宗愛宕下青松寺地中吟窓院

d 三十石 藤田亀二郎

(注) 分中38に御徒士三十石国許勤「辰十五」とある。記事日付は弘化四(1847)年五月となっているが、年代が合わない。

禅宗愛宕下青松寺地中忠孝院 本遊院様御廣式番

e 三十石勤料五俵 武藤金三郎

(注) 分中33に勘定衆並三十石勤料五俵江戸勤(江戸坊主組頭兼役)「辰二十八」とある。なお「忠孝院」は「孝寿院」の誤写か。

浄土宗浅草新堀端壽松院地中峯林院

f 三十石 村岡仙之助

(注) 分中38に御徒士三十石江戸勤「辰十八」とある。なお「峯林」は「峯休」か。

浄土宗浅草山谷丁道林寺 御次勤

g 三十石勤料五俵 直崎葉助

(注) 分中40に御徒士三十石勤料十俵国許勤(御次勤)「辰三十二」とあり、嘉永二年二月に帰郡とも思われるが、本書は年齢が嘉永三戌年基準であり、疑問が残る。

h 法華宗牛込榎丁宗柏寺 左京大夫様附

三十石勤料五俵 中谷清五郎

(注) 分中15に相之間三十五石勤料五俵江戸勤(武田舜山様御附人)「辰二十一」とある。慶応三年八月に増加か。

i 日蓮宗麻布宮村丁本光寺 御輿賄勤

三十石勤料五俵 松本良助

(注) 分中5に御徒目付三十五石勤料五俵国許勤「辰三十八」とある。文久四年十一月に真華院診療の医師を京都まで護送している。

31

浄土宗芝高輪正覚寺 大目附□主加人

a 三十石 村石銀平

(注) 分中30に三十五石勤料十五俵江戸勤(書役兼)「辰十八」とある。支配方大目附とあるが詳細不明。

禅宗市ヶ谷月桂寺 □□様御附

b 三十石勤料五俵 池田謹之丞

(注) 分中8に相之間三十五石勤料十五俵江戸勤(武田舜山様御附人)「辰三十四」とある。□□部分は「柳生」とも読めるが、舜山の次男は柳生家養子であり、実はそちら付か。

禅宗芝飯倉瑠璃光寺 御年寄詰番加人

c 三十石 新沼虎之助

(注) 分中36に勘定衆並三十石勤料五俵江戸勤(書役兼)「辰十九」とある。

法華宗小石川本念寺

d 三十石勤扶持前之通 福原亀藏

(注) 分中1に御徒目付三十五石勤料五俵江戸勤「辰二十」とある。

禅宗小日向水道丁清光院 御医師

e 三十石 植村理仙

(注) 分中41に三十石江戸勤(針医本道兼)「辰十八」とある。

禅宗麻布谷丁永昌寺 本遊院様御廣式

f 三十石 原田又三郎

(注) 分中4に御徒目付三十五石(本遊院様御賄役兼)「辰二十四」とある。

浄土宗池之端称仰院

g 三十石 掛田房次郎

(注) 分中41に御徒士三十石国許勤「辰十八」とある。安政二年十二月に帰郡か。

法華宗浅草日蓮寺地中林光寺 御作事杖突

h 三十石勤料五俵 高濱久次郎

(注) 分中34に勘定衆並三十石勤料十五俵江戸勤(御作事杖突兼)「辰六十四」とある。安政三(1856)丙辰年に六十四歳であれば慶応三(1867)年には七十五歳になるが。

浄土宗天徳寺地中榮立院 御部屋附

i □ 松本九兵衛

(注) 分比定困難。

浄土宗芝本丁願生寺 御書部屋手伝

j 三十石勤料五俵 中谷要人

(注) 分中26に勘定衆三十五石勤料五俵江戸勤(御書部屋兼役)「辰三十」とある。

32

同寺

a 三十石 中谷金太郎

(注) 分中37に勘定衆並三十石勤料五俵江戸勤(武田舜山様御附人)「巳十七」とある。

浄土宗天徳寺地中榮立院 御次勤

b 三十石 松本源七

(注) 分中25に勘定衆三十五石勤料五俵国許勤(小給人・御国坊主組頭兼役)「午四十七」(源寿又弥七)とあり、おそらく同一人か。

浄土宗芝増上寺地中林松院

c 三十石 中嶋徳三郎

(注) 分中43に御徒士三十石江戸勤「亥十七」(朝五郎)とあるのが同人か。

禅宗市ヶ谷月桂寺 御部屋附

d 三十石 生田佐兵衛

(注) 分中43に御徒士三十石江戸勤「寅十七」とあるのが同人か。

日蓮宗谷中三方地店佛心寺 同心小屋頭勤金五両二人扶持御譜代

十二月朔日被仰付之 駒込御留主居下役勤金一両

e 大野利助

(注) 分御徒士並譜代扱いと思われるが、比定困難。

御徒士小普請

f 宮城丑之助

(注) 分41に御徒士三十石国許勤「巳九」とあるが、安政四年九月に帰郡で、年齢は誤記か。

御徒士並

禅宗深川七軒寺工増林寺

g 金三両二分二人扶持 片倉十左衛門

(注) 分比定困難。

浄土真宗駒込富士前丁教元寺

h 大野榮蔵

(注) 分比定困難

日蓮宗小石川小原丁本念寺 御作事杖突勤金一両

i 金四両二人扶持勤料一人扶持 橋本勇助

(注) 分中41に御徒士三十石江戸勤(御次勤)「申三十一」(寅右衛門)があるが、同一人判定は困難。

33

浄土宗駒込富士前丁天然寺 水之手役

a 金四両二人扶持 松岡喜右衛門

(注) 分中45に御徒士三十石江戸勤「卯十七」があるが、同一人判定は困難。

法華宗下谷竹丁本光寺 水之手役

b 金三両一人扶持 福原恒次郎

(注) 分中45に御徒士三十石江戸勤「辰二十六」とあり、慶応三年九月に昇格と思われる。

浄土真宗麻布善福寺地中西福寺

c 金三両二人扶持 久保東紹

(注) 分中52に御徒士並国許勤(本道、外科兼)久保寿庵があるが、比定困難

浄土宗西久保大養寺 御作事杖突勤料老人扶持

d 金四両二分二人扶持勤金二分 奥田真次郎

(注) 分中37に勘定衆並三十石江戸勤(大工棟梁見習、杖突兼)「辰三十九」とある。慶応三年六月に昇格か。

浄土真宗西久保光明寺 御用人世話役手伝勤料老人扶持

e 金三両二分二人扶持勤金一両 金子種蔵

(注) 分中44に御徒士三十石勤料五俵江戸勤「辰三十一」とある。慶応三年七月昇格か。

浄土真宗芝二本榎正満寺 御用人詰番

f 金三両二分二人扶持 高橋弥吉

(注) 分中49に御徒士並江戸勤御譜代(書役兼)「辰十八」とある。

日蓮宗三田小山長久寺 御奥御料理方下役勤金一両

g 金三両二分二人扶持勤料老人扶持 石川才治

(注) 分中50に御徒士並国許勤御譜代(大津御蔵屋敷守兼)「辰三十八」とある。安政三年十二月に転任と思われるが、この程度の者でも敢えて大津転任の必要があつたのか。

浄土真宗浅草報恩寺地中養蓮寺 棟梁見習勤金二分

h 金三両二人扶持勤料一人扶持 岩本左文太

(注) 分中比定困難。

浄土宗白金目黒村本願寺 勤料一人扶持

i 金三両二人扶持 望月桂蔵

(注) 分中51に御徒士並国許勤御譜代「辰二十八」とある。安政四年四月帰郡か。

34

禅宗四ツ谷塩丁龍昌寺 御目付物書

a 金五両二人扶持 菊池岩五郎

(注) 分中43に御徒士江戸勤三十石勤料五俵(書役兼)「辰二十八」とある。慶応二年三月昇格か。支配方大目附とあるので、目付方であろう。

浄土真宗麻布永坂光照寺 大目付水汲手伝勤料老人扶持

b 金三両二分二人扶持 牧野吉蔵

(注) 分中比定困難。

禪宗谷中瑞松寺 御武具方

c 金四両二人扶持勤料一人扶持 渡辺菊三

(注) 分中52に御徒士並江戸勤「辰五十二」とある。安政五年十一月迄、御武具方兼か。

御徒士並小普請

禪宗愛宕下青松寺地中孝寿院

d 柴田幸治

(注) 分中61に御徒士並国許勤御譜代(武田舜山様御附人)「亥十七」(鏡蔵)とあるが、職務と勤務地が不一致であり判定困難。

席外

小給人

合計十二人(以下省略)

坊主

合計二十八人

坊主小普請

坊主格

合計十人

御勝手同心

合計五名

その他読取不能 以上

(完)



藩主縁戚に関する付属資料

柳澤縁戚記（文化年間）には第五代保泰期における縁戚諸家が記されているが、ある意味詳しくかえって分かりにくいので、各藩主と交際する他藩主との大まかな関係をつかむために、縁戚記を参考にして作成したものである。従って厳密な意味での史料ではなく、検索用の心覚えと考えて欲しい。なお当代以降は編者による追補で、青字は同追記（ウィキペディア等からの推定で検証未了）である。また（ ）は養子関係と思われるものであるが、柳澤諸家以外は概略に留まる。

1

（文化元年六月保光女登勢子入與、後改伊勢守）

黒川藩 柳澤伊賀守（伊勢守） 光被

吉保次男経隆より六代目、父信有正室は信鴻養女（法雲院種子）、光被の継室が保光の娘（唯心院登勢子）

（前正室は新庄藩戸澤正親の娘。）

祖父保卓の継室は高取藩植村家敬の娘、娘が土岐頼香の正室

（嗣子光昭は保泰の十男で柳澤保恵の実父）

光昭は郡山第四代藩主保泰の息、正室が小倉新田藩小笠原貞

哲、継室が大垣新田藩主戸田氏有の娘）

経隆Ⅱ（里済）Ⅱ（里旭）Ⅱ（保卓）Ⅱ信有Ⅱ光被Ⅱ（光昭）Ⅱ（光邦）

（文化元年七月病死、跡目吉蔵里世）

三日市藩 柳澤信濃守里之

吉保三男時睦より四代目、保経は吉保の末男、里之は信鴻の

五男、父信著の正室が信鴻の養女（貞操院千恵子）

里之の娘が尾張藩付家老竹腰正定の正室

里世の正室は備中松山藩板倉勝政の娘

2

岡藩

中川修理大夫久貴

久貴は保光三男で中川久持の末期養子

忠慶は広島藩主浅野綱長の四男、久貞は吉田藩主信祝の二男  
久貞の娘が津藩主藤堂高嶷・小田原藩小笠原忠頭（次に勝山藩主小笠原長教）の正室

久教は彦根藩井伊直中の六男、久昭は津藩藤堂高兌の息

（忠基（慶）Ⅱ（久貞）Ⅱ久持Ⅱ（久貴）Ⅱ（久教）Ⅱ（久昭）

（文化五年四月隠居、養子信典は守山藩主松平頼慎の弟）

高家旗本 武田虎之助（織部） 護信

護信の父信明が信鴻の三男で、安芸守信安の養子

護信の養子左京大夫信典の養子が信之（保光七男）、護信の

正室が青木信周（吉里の息）の娘

（信之の息が柳生藩主柳生俊順・黒川藩主柳澤光邦）

信安Ⅱ（信明）Ⅱ護信Ⅱ（信典）Ⅱ（信之）Ⅱ崇信

高家旗本 六角越前守広孝

広孝の娘松巖院富子の婿養子が広壽（信鴻四男）

早世（s11参照）

里頭は保光の九男、正室は里世の娘、継室が村松藩堀丹後守直庸の娘

泰孝の正室は平戸藩松浦皓の娘

（平戸藩松浦大和守皓の正室は保光娘随仙院睦子）

時睦Ⅱ（保経）Ⅱ信著Ⅱ（里之）Ⅱ里世Ⅱ（里頭）Ⅱ泰孝Ⅱ徳忠

(享和三年六月隠居)

六浦藩

米倉丹後守(主計頭) 昌由

昌由(旗本米倉家)の高祖父丹後守忠仰は吉保の四男、

養父長門守昌賢の正室が信鴻娘(心珠院浅子)

昌由の正室は養父昌賢の娘(清凜院)

祖父昌晴の正室が柳澤保経の娘(瑞泉院)

忠仰||里矩|| (昌晴) ||昌賢|| (昌由)

旗本

伊奈小十郎

吉里三男(忠敬)が改易された半左衛門の実父

3

(文化六年三月、離縁届、御用番牧野備前守忠精へ、御先手三浦和泉守ヲ以、被指出ニ付両敬相止)

旗本

伊奈幸之助惟忠

伊奈家分知

(実は、文化六年二月十七日、御年始御入、直に御逗留在之。十四日豊前より離縁の儀、茂大夫を以て申し来る)

村上藩

内藤豊前守信敦

正室が保光娘観興院喜久子(離縁)

高崎藩

松平右京亮輝延

輝延の高祖父右京大夫輝貞の正室が吉保養女(長慶院市子)

吉保の娘頭曜院綾子が輝貞養女として、浜松藩主松平豊後守

質訓継室

祖父右京大夫輝高の娘(長享院永子)が保光の正室

養父(兄)右京大夫輝和の娘幸子が保民(松涼院早世)正室

輝健の正室は白河藩主松平定信の娘

輝貞|| (輝規) ||輝高||輝和|| (輝延) ||輝健(承) || (輝徳) || (輝充)

小田原藩

大久保安芸守忠真

忠真の高祖父大蔵少輔忠英(方)の正室が吉保の養女(了真院幾子) 実は野宮宰相定基の娘

曾祖父出羽守忠興の正室が吉里娘(本光院輝子)

父加賀守忠顕の正室が岡藩中川久貞の娘

(忠愍の正室が島津重豪の長男斉宜の娘)

忠英||忠興||忠由||忠顕||忠真||忠愍||忠礼

新庄藩

戸澤富寿正礼(正胤)

正礼の高祖父上総守正諶の正室が吉里娘(翠松院俊(幹)子)

正礼の姉(正親の娘)が柳澤伊賀守光被の正室

正胤の娘が上山藩松平信宝の正室

正令の正室が島津重豪の娘(桃令院貢子)

正諶||正産||正良||正親||正礼(正胤) ||正令

(文化三年八月津藩相統)

津(久居)藩

藤堂左近将監高兌

高兌の高祖父(久居藩主)左京亮高朵の祖父、佐渡守雅の正室が信鴻養女(妙仙院嘉南子・信睦の娘)

(s7津藩参照)

高雅||高敦||高朵||高興|| || ||

高治||高朗||高悠||高疑||高兌||高猶

4

拳母藩

内藤山城守政峻

政峻の高祖父(安中藩)山城守政森の正室が吉保の娘(玉相

院春子

吉保養女の珠松院悦子（曾雌定秋娘）を継室とするのは誤りで早世不嫁

学文は紀州藩主宗将四男、政峻は本家延岡藩主政陽の次男  
政成は井伊直中の八男（中川久教・井伊直弼・内藤政義が兄弟）

政森Ⅱ政里Ⅱ政苗Ⅱ（学文）Ⅱ（政峻）Ⅱ（政成）

久留里藩 黒田豊前守直服

直服の高祖父大和守直純の父豊前守直邦の正室が吉保養女（寿量院土佐子・折井正利の娘）

直候は庄内藩酒井忠徳の三男（s5庄内藩参照）

直邦Ⅱ（直純）Ⅱ直享Ⅱ直英Ⅱ直温Ⅱ直方（服）Ⅱ直候

宮津藩 松平主計頭（大隅守）質貞

（宗允）

質貞の正室が松平右京大夫輝和の娘

高祖父（浜松）豊後守質訓の正室が吉保娘（顕曜院綾子・松

平輝貞養女）（松平右京亮輝延の項参照）

資訓Ⅱ資昌Ⅱ資尹Ⅱ資承Ⅱ資貞（宗充）Ⅱ宗発

旗本 戸田松三郎忠集

忠集の祖父弥十郎忠倚の正室が吉里娘（智光院満子 再嫁）

（享和三年正倫隠居）

福山藩 阿部伊勢（備中）守正倫

正倫の正室が信鴻娘（宝池院方子）

祖父伊勢守正福の娘が柳澤伊賀守信有継室

正福Ⅱ正右Ⅱ正倫Ⅱ正精Ⅱ正寧Ⅱ正弘

（文化三年四月死去、文化元年二月保泰婚姻相整之）

大垣藩 戸田采女正氏教

氏教の娘（承天院貞子）が保泰の正室

養父采女正氏英の娘が右京亮輝延伯父の下野守輝行の正室  
（輝行は高崎藩嫡子であつたが早世）

氏教は館林藩松平武元の五男で氏英の婿養子

氏教の息に飯山藩本多助賢、三上藩遠藤胤統

氏正の正室が島津重豪の娘親子（真華院姉妹）

（s14大垣新田藩参照）

氏英Ⅱ（氏教）Ⅱ氏庸Ⅱ氏正

（文化元年七月病死）

備中松山藩 板倉周防守勝峻

勝峻の高祖父周防守勝澄の子忠尊が吉里三男伊奈忠敬の婿

養子

父勝政の正室（嫡母）が戸田采女正氏英の娘

同勝政の娘が柳澤里世の正室

勝職の正室が戸田氏庸の娘、養嗣子勝静は松平定信の孫

勝澄Ⅱ勝武Ⅱ勝従Ⅱ勝政Ⅱ勝峻Ⅱ勝職Ⅱ（勝静）

5

（文化二年七月死去）

佐倉藩 堀田大蔵大輔正順

正順の姉（父相模守正亮の娘）が戸田采女正氏英の正室

正享〓正順〓正時

吉田藩 松平伊豆守信明

信明の養女が高崎藩主松平右京亮輝延の正室

(s3高崎藩参照)

曾祖父伊豆守信祝の娘(栄寿院)が右京大夫輝高の室

信祝の正室(松泉院菊子)が姫路藩酒井忠孝の養女(丸亀

藩京極高豊の娘)で、吉里の正室円徳院頼子(輝高娘)と

姉妹(s6姫路藩参照)

信祝の息に岡藩中山久貞(久貴の養祖父)

養女が岡藩中川修理大夫久貴(保光の三男)の正室

娘が林田藩建部政醇・大多喜藩松平正敬の正室

信祝〓信復〓信礼〓信明〓信順〓信宝

(享和三年七月家督、文化五年死去)

大多喜藩 松平備前守正通

(弾正忠正路)

松平伊豆守信明と同家(大河内松平宗家)

正温は吉田藩松平信祝の二男、正敬の正室は信明の娘

正貞〓(正温)〓正升〓正路(通)〓正敬〓正義

(享保三年十一月隠居)

三春藩 秋田信濃守謚季(長季)

長季の父信濃守俊季の正室が松平伊豆守信明の父信礼の娘

長季の正室が関宿藩久世広誉の娘

定季〓情(俊)季〓長(謚)季〓孝季

(文化二年忠徳隠居)

庄内藩 酒井左衛門尉忠徳

忠徳の高祖父左衛門尉忠義の正室が松平右京大夫輝貞の姉

(輝綱の娘)

忠徳嫡子忠器の正室が松平伊豆守信明の娘

忠徳の正室が徳川(田安)宗武の娘(松平定信の姉妹)

忠義〓忠貞〓(忠寄)〓忠温〓忠徳〓忠器

(文化八年二月高中死去)

丸亀藩 京極能登(若狭)守高中

高中の父佐渡守高矩の正室が伊豆守信祝の娘で、輝高の室

(栄寿院)の姉(長享院永子の伯母)

曾祖父高豊の娘(酒井忠挙養女)が松平信祝の正室

秋元涼朝養女(秋田延季の娘)が高中の正室

高豊〓高城〓高矩〓高中〓高朗

6

高富藩 本庄近江守(式部少輔)道昌

道昌の祖父山城守道揚が松平伊豆守信明の祖父信復の三男

道昌の五男輝充が高崎藩主輝徳の養嗣子

養嗣子近江守道貫は松平信明の四男(文化三年養子縁組)

(道揚)〓(道利)〓道昌〓(道貫)

(文化三年五月死去)

旗本 杉浦丹波守正勝

正勝の正室が黒田豊前守直服の高祖父大和守直純の娘

松平伊豆守信明の弟正直が正勝の養子

(文化二年死去)

旗本 安藤伊予守直之

直之は松平伊豆守信明の曾祖父伊豆守信祝の子

松平右京大夫輝高の室(栄寿院)の舎弟(長享院叔父)

旗本 松平美作守信弥

信弥の正室が松平右京亮輝延の妹、大河内松平分知

松代藩 真田豊後(伊豆)守幸専

幸専の曾祖父弾正忠信弘の娘(貞徳院輝子)が信鴻の継室で

保光の生母

幸専は彦根藩井伊掃部頭直幸の九男

幸貫は松平定信の二男、幸良は幸貫の長男ながら兄弟として届けられたものの、後に父の養嗣子となった。

真田豊後守幸良(栄)

幸良正室は保泰の娘(貞松院牧子)、幸良は幸貫嗣子であったが早世。その子幸教が祖父幸専の養嗣子とし継承

信弘||信安||幸弘|| (幸専) || (幸貫) — 幸良||幸教

宇和島藩 伊達遠江守村寿

村寿の祖父遠江守村年の娘(本具院幾子)が信鴻正室

宗賛は仙台藩主綱宗の三男、村年の正室は同吉村の娘、

村候正室は佐賀藩主鍋島宗茂の娘、村寿正室は仙台藩主重村の娘

宗利|| (宗賛) || 村年||村候||村寿

仙台藩

政千代

松平周宗

政千代の高祖父陸奥守吉村の祖父陸奥守綱宗の三男伊達遠

江守宗賢が宇和島藩伊達家に養子、宗賢は信鴻正室本具院の

祖父

周宗は十六歳で御目見(叙位)なく特例隠居

綱宗||綱村||吉村||重村||斉村||周宗||斉宗

姫路藩

酒井雅樂頭忠道

忠道の高祖父雅樂頭親愛の祖父雅樂頭忠孝の娘が吉里正室

(円徳院頼子)

忠孝の養女(京極高豊娘)が松平伊豆守信明の曾祖父伊豆守

信祝の正室

忠孝||忠相||親愛||親本||忠恭||忠以||忠道||忠実||忠学

7

(文化元年三月病死)

姫路新田藩

酒井左近将監忠交

忠交は雅樂頭忠孝の玄孫雅樂頭忠恭の四男・酒井雅樂頭家の

分知

(文化三年八月卒)

津藩

藤堂和泉守高疑

高疑は佐渡守高雅(継室が信鴻養女妙仙院嘉南子)の養子

(高雅は久居藩主であったが、養子高疑が津藩継承)

岡藩中川修理大夫久貴の祖父久貞の娘が高疑の正室

(s3津(久居)藩藤堂左近将監参照)

高治||高朗||高悠||高嶺||高兌||高猶

(文化四年八月俊則隠居)

柳生藩 柳生但馬守俊則

俊則の養父備前守俊峰は真田弾正忠信弘の次男(貞徳院の兄)

俊則(松前家)の養嗣子但馬守俊豊は保光六男 文化二年整

俊豊の正室が村松藩堀丹後守直庸の妹

俊章(俊則長男)の養嗣子俊能は相良藩田沼意正の二男

俊能の養嗣子俊順は高家武田家(保光七男信之の息)

純順の養嗣子俊益は遠順の弟(s2高家旗本 武田家参照)

(俊平)|| (俊峯)|| (俊則)|| (俊豊)|| 俊章|| (俊能)|| (俊順)|| (俊益)

(文化元年末英隠居、文化七年死去)

小野藩 一柳土佐守末英

末英の父左京亮末栄の正室が真田弾正忠信弘の娘(貞徳院妹)

孫末周の正室が津藩主高嶺の娘

末昆||末栄||末英||末昭||末周

岡崎藩 本多中務大輔忠顕

忠顕の曾祖父中務大輔忠盈は真田弾正忠信弘の四男(貞徳院の弟)

忠典の正室は秋元永朝の娘(s9山形藩参照)

忠顕は西条(紀伊分家)藩主松平頼謙の二男

(忠盈)|| 忠肅|| 忠典|| (忠顕)|| 忠考

島原藩 松平主殿頭忠馮

忠馮の父主殿頭忠恕の正室が真田豊後守幸専の叔母(真田信安の娘)

忠馮の正室が井伊直幸の娘、十男幸忠が松代藩主真田幸貫の養嗣子であったが早世、忠候の正室が彦根藩主井伊直中の娘

忠刻||忠祇||忠恕||忠馮||忠候

彦根藩 井伊掃部頭直中

直中の弟が真田右京大夫幸弘の養子豊後守幸専

直中の六男久教が中川久貴の婿養子、久教養子に藤堂高兌息

の久昭

直中の娘は島原藩松平忠候のほか蜂須賀・榊原・内藤等の正室

直幸の娘が秋元永朝の正室

直定||直幸||直中||直亮||直弼

林田藩 建部内匠頭政賢

政賢の正室が真田豊後守幸専の伯母(真田信安の娘)

政賢四男政醇の正室が松平信明の娘

政民||長教||政賢||政醇

棚倉藩 井上河内守正甫

正甫の正室が真田右京大夫幸弘の娘(浜松藩から不祥事で

左遷)

正経の娘が松平信明の正室

正甫の娘が真田幸専の養女として幸貫の正室



(s 9 松代藩参照)

正経||正定||正甫||正春

8

高取藩

植村駿河守家長

家長の父出羽守家利の正室が伊達遠江守村寿の妹(村候の娘)

高祖父出羽守家包の父出羽守家敬の娘が柳澤伊賀守光被の祖父伊賀守保卓の継室

家敬||家包||家道||家久||家利||家長||家教

笠間藩

牧野越中守貞喜

貞喜の正室が伊達遠江守村寿の妹(村候の娘)

貞長の娘が山形藩秋元永朝の継室

貞通||貞長||貞喜||貞幹

麻田藩

青木甲斐守一貞

父甲斐守一貫が伊達遠江守村寿の祖父遠江守村年の三男(本具院の弟)

一新||一貫||一貞||重竜

米沢新田藩

上杉駿河守勝定妻

上杉駿河守勝定の正室は、大久保安芸守忠真の曾祖父大久保出羽守忠興の娘で、忠興正室の本光院輝子(吉里娘)が養母(保光の従弟女)

旗本

大久保隼人教富

公家

野宮中将の母 勝賢院

野宮宰相中将定和の正室は、大久保安芸守忠真の曾祖父出羽守忠興の娘で、忠興正室の本光院輝子(吉里娘)が養母(保光の従弟女)となる

大久保大蔵少輔忠英の正室(吉保養女了真院幾子)が野宮宰相定基の娘 (s 3 小田原藩参照)

旗本

松平左七郎(縫殿頭)

左七郎の祖父大隅守乗友の正室が戸澤富寿正礼の高祖父上総守正諱正室の翠松院乾子(吉里娘)の養女(離縁)

(文化二年死去)

掛川藩

太田備中守資愛

右大隅守乗友との続合で両敬継統

9

小幡藩

松平宮内少輔忠恵

忠恵の高祖父玄蕃頭忠暁の正室が黒田豊前守直邦の娘

直邦の正室は吉保養女(寿量院土佐子)(s 4 久留里藩参照)

忠暁||忠恒||忠福||忠疆||忠恵||忠恕

桑名藩

松平下総守忠翼

忠翼の養父下総守忠知及び養祖父下総守忠功が共に紀伊中納言宗将の息、忍藩主阿部播磨守正由も同じく宗将の息で阿部家(宗家とは福山藩主阿部正倫の正室が信鴻娘宝池院

数富の正室が大久保安芸守忠真の妹、大久保家分知

で縁戚関係）と奥平松平家が両敬

忠翼は与板藩井伊直朗の二男（忠亮の代に三方領地替により忍藩に転封、後任は白河藩より定永）

忠刻Ⅱ忠啓Ⅱ（忠功）Ⅱ忠和（知）Ⅱ忠翼Ⅱ忠亮

（文化二年十月死去）

安中藩 板倉伊豫守（主計頭）勝意

勝意の曾祖父佐渡守勝清の娘が黒田豊前守直服の曾祖父豊前守直享の嫡子鉄三郎直弘の正室（離縁するも両敬）

父勝暁の正室が新庄藩戸澤正庸（正謙の祖父）の娘（s3新庄藩参照）

勝尚の正室が福山藩阿部正倫の娘

勝清Ⅱ勝暁Ⅱ勝意Ⅱ勝尚

福島藩 板倉内膳正勝長

板倉伊予守勝意と同家の由緒

関宿藩 久世大和守広誉

広誉の妹が藤堂左近将監高允の養父佐渡守高嶺の正室

正室が棚倉藩主松平武元の娘

娘が三春藩主秋田謚季長季・松本藩主松平光庸の正室

広明Ⅱ広誉Ⅱ広運Ⅱ広周

（文化七年八月死去）

山形藩 秋元但馬守永朝

永朝の娘が岡崎藩主本多中務大輔忠頭の養父中務大輔忠典の正室

涼朝の養女（秋田延季娘）が京極高中の正室

永朝の正室は井伊直幸の養女（井伊直存の娘）、継室が牧野貞長の娘

（涼朝）Ⅱ永朝Ⅱ久朝Ⅱ（志朝）

（文化五年死去）

忍藩 阿部播磨守正由

正由の曾祖父豊後守正允の娘が姫路新田藩主酒井左近将監忠交の正室

正由は紀州藩主宗将の十一男、拳母藩主内藤政文・西条藩主松平頼謙・桑名藩主松平忠功等が兄弟

正允Ⅱ正敏Ⅱ正識Ⅱ（正由）

中津藩 奥平大膳大夫昌高

昌高の祖父大膳大夫昌邦の正室が阿部正由の曾祖父豊後守正允の娘

昌高は重豪の二男（真華院淑子の兄）、岡山藩主池田慶政等の父

昌邦（鹿）Ⅱ昌男Ⅱ（昌高）Ⅱ昌暢

10

（文化四年五月死去）

旗本 土岐縫之助（出羽守）頼門

頼門の父主税頼香の正室が柳澤伊賀守光被の祖父伊賀守保卓の娘

旗本 石原庄三郎正敬



正敬は伊賀守保卓の次男。清左衛門正範の養嗣子となる

旗本

牟礼清左衛門勝昌

勝昌の正室が伊賀守保卓の娘

旗本

石巻栄之助康由

康由は伊賀守保卓の三男、権右衛門康福の養嗣子となる

高家旗本

日野伊豫守資施

資施養父主税資直の正室が柳澤信濃守里之の祖父弾正少弼  
保経の娘

(文化三年八月隠居)

岡部藩

安部摂津守信享

信享の娘が柳澤信濃守里之の正室

(信允の娘とする資料もあるが、里之と信享は同年代であり、  
信享の娘が入興するとは考えにくく本文書の誤解か)

信賢||信平||信允||信享

(文化五年八月死去、跡守業弟守典)

旗本

三枝土佐守守義

守義の嫡子宗十郎守業の正室が柳澤信濃守里之の娘(後に離  
縁)

(文化五年四月死去)

旗本

長沢滋丸(宮内)資模

資模の父要人資信の娘が信鴻三男武田安芸守信明の正室

1  
1

(文化六年七月死去)

旗本

大沢亀太郎(弾正)定壽

六角越前守広孝の実家で、定壽の正室が信鴻四男六角伊豫  
守広壽の娘

旗本

速見左近(甲斐守)長祥

長祥の養父春牛の妹が六角越前守広孝の正室

春牛の弟速見登の娘(同越前守広孝の養女)が左近長祥の正  
室

旗本

丸毛肥前守政良

政良の亡嫡子主水正政美の正室が越前守広孝の娘

旗本

黒川左京正明

越前守広孝の息で黒川家の養子となる

(以上六角家 s2 参照)

旗本

上田弥右衛門義茂

義茂は戸田松三郎忠集の従弟 (s4 参照)

(文化四年七月隠居)

旗本

稲葉大膳正順

伊奈小三郎忠盈の縁者 (s2 参照)

上山藩

松平山城守信愛

信愛の祖父山城守信享が保光と別懇（奢侈文人）

勝山藩

小笠原土用犬丸が母

（相模守長貴）

中川修理大夫久貴（保光三男）の祖父修理大夫久貞の娘（久喜の伯母）で土用犬丸長貴の父相模守長教の正室（寵容院）

（s2岡藩参照）

（文化五年二月両敬取扱、同四月隠居）

旗本

柳澤六郎左衛門政位

柳澤孫左衛門安吉七代目

12

旗本

柳澤八郎右衛門聴信

同安吉の次男吉次六代目

（後折り）追記分と思われる。おそらく文化八年迄の状況で、それ以降の発生案件は書かれていない）

母里藩

松平志摩守直方

直方の継室が松平右京大夫輝和の三女鶴子（保光正室長享院の姪）

直行||直嵩||直方

（文化六年隠居、跡斉興）

薩摩藩

松平薩摩守斉宣

父栄翁重豪の二男が奥平大膳大夫昌高（中津藩へ養子）、保

光と別懇

中津藩奥平家と福山藩阿部家が両敬（s9中津藩参照）阿部家と当家も姻戚両敬であつたので、これにより薩摩島津家とも両敬になる。

（後に重豪娘の真華院淑子が保興の正室となることで、重豪の子女を始めとする左の薩摩島津家縁戚と繋がることとなる

家斉御台所広大院茂子・中津藩奥平昌高・八戸藩南部信順・桑名藩松平定和室柔正院孝子・福岡藩黒田長博・大垣藩戸田氏正室親子・郡山藩保興室真華院淑子・新庄藩戸澤正令室貢子等）

重年||重豪||斉宣||斉興||斉彬

大垣新田藩

戸田淡路守氏宥

戸田采女正氏教と分知関係。

氏教嫡子伊賀守氏庸の正室が、氏宥の養父左近将監氏興の妹氏宥の娘が黒川藩柳澤光昭の正室（s1黒川藩参照）戸田淡路守氏綏の正室が保光の娘（英鑑院鎮子）、氏綏は氏教の四男

氏養||氏興||（氏宥）||氏綏

旗本

戸田内膳

戸田采女正氏教と分知関係。

松本藩

松平丹波守光壮（年）

正室（早世）が戸田采女正氏教の娘（辰子）

光庸の正室が久世広譽の娘

光行Ⅱ光壯(年)Ⅱ光庸

13

公家 外山修理權大夫光実

光実の正室が青木大弥太信周(吉里五男)の娘(五百子)  
嫡子勘解由次官光施の正室が保光の娘(悦子)

公家 冷泉侍従宰相為訓

為訓の正室が柳澤兵部信復(信鴻息)の娘(琴子)、養女(茂都子)

公家 風早宰相実秋

実秋の正室が柳澤兵部信復の娘(春子)、春子は種丸公文の実母

生実藩 森川兵部少輔俊敏

保泰父君(保光)と別懇

(文化二年十二月より)

小倉藩 小笠原伊豫守忠徳(固)

忠徳の曾祖父忠基の正室(梅)と岡藩久貴(保光三男)の曾祖父中川久慶は広島藩綱長の子であり義理兄弟、又綱長嫡子の吉長の養女が忠徳の祖父忠総の正室でもあり、小倉藩と岡藩は広島藩を介し両敬関係

忠基Ⅱ(忠総)Ⅱ忠苗Ⅱ(忠固)(徳)

(文化三年六月致仕)

飯山藩 本多豊後守助受

助受の養嫡子の彦三郎(助賢)が戸田采女正氏教の二男

助盈Ⅱ助受Ⅱ助賢

三上藩 遠藤左近将監胤富

胤富は松平輝高正室(吉田藩主松平信祝の娘桂寿院)の甥、  
保光正室(長享院永子)の従弟(吉田藩主信復の七男)

(s3高崎藩、s5吉田藩参照)

戸田采女正氏教の三男直之進胤統が胤富の養嗣子

旗本 藤掛主水永貞

永貞は松平右京亮輝延の妹(止子)の養子

14

(文化六年十一月)

白河藩 松平越中守定信

定信の娘が松平右京亮輝延の嫡子撰津守輝健の正室(s3高崎藩参照)

(松代藩主真田幸専の養嗣子真田幸貫が定信の二男)

定信の嫡子式部大輔定永が白河藩から桑名藩に転封(s9桑名藩参照)

定和の正室が重豪の九女柔正院孝子(真華院の姉)、長男の定猶が早世の為婿養子として定敬(徳川茂徳・松平容保と共に高須三兄弟)

定信Ⅱ定永Ⅱ定和Ⅱ定猶Ⅱ(定敬)

(文化七年十一月より)

尾張附家老 竹腰山城守正定

正定の正室が柳澤信濃守里世（三日市藩）の姉充子

村松藩 堀丹後守直庸

直庸の妹が柳生藩主柳生飛騨守俊豊（保光六男）の正室

娘が三日市藩柳澤里頭（保光九男）の継室

（後折 奥書）享和三（1803）癸亥年春、出来にて候得共、此一冊、

享和二壬戌冬より取調

于時、文化改元（1804）甲子年初冬十月、朱加筆。従夫後、追々

糺記之

平戸新田藩 松浦大和守皓

正室が保光の娘（随仙院睦子）、三日市藩柳澤弾正少弼泰孝の正室は娘

相馬中村藩 相馬大膳亮允胤

正室が保泰の娘（本明院隣子）

泉藩 本多越中守忠徳

正室が保泰の娘（妙芳院馨子）

唐津藩 小笠原佐渡守長和

保泰九男の長和が能登守長会の養嗣子

（棚倉から転封の初代長昌には嫡子長行が居たが幼児であるとして庄内藩酒井忠徳六男の長泰、長泰の次に一族旗本から長会、次に郡山藩保泰九男の長和、次に松本藩松平光庸

長男の長国、次に藩内抗争の結果長昌嫡子の長行が廿九歳で長国嫡子となり、四十歳で嗣子のまま老中として長州戦争小倉口の総指揮官となり惨敗した。  
典型的な封建制度破綻の体现者である）

長昌Ⅱ（長泰）Ⅱ（長会）Ⅱ（長和）Ⅱ（長国）―（長行）

（完）